

平成 22 年 5 月 20 日現在

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2007～2009  
 課題番号：19530500  
 研究課題名（和文）アルコール依存症者の「語り」からみた回復過程の質的分析と自助グループの役割  
 研究課題名（英文）The study on narratives of recovery process and the function of SHG in alcoholics  
 研究代表者  
 児島 亜紀子（KOJIMA AKIKO）  
 大阪府立大学・人間社会学部・教授  
 研究者番号：40298401

研究成果の概要（和文）：本研究では、AA（アルコホーリクス・アノニマス）のメンバーが、飲まない生き方（ソブリエティ）を獲得する際、人格的変容がどのように生じたかに焦点づけ、検討を行った。その結果、以下の5つの点がメンバーの変容にあたっての重要な要素であると結論づけるに至った。すなわち、ミーティングに参加する動機づけを手に入れること、アルコール依存症者であることを自覚し続けること、他者から与えられたものを受け止めること、他者に向かうこと、懐疑を通してハイヤーパワーを信じることの5つである。

研究成果の概要（英文）：When a member of the AA gets way of sobriety life the transformations occur in the personality of them. The transformation has five characteristics. These factors may be categorized as:(1)obtaining the motive to participate in the meeting ;(2)being aware that he/she is an alcoholic ;(3)responding to things given from the others ;(4)directing to the others; and (5) communicating with the Higher Power.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：社会福祉学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：AA、回復、スピリチュアリティ、変容、ハイヤーパワー、他者

## 1. 研究開始当初の背景

ここにち、アルコール関連問題が精神保健福祉領域において注目を集めている。アルコール依存症による患者の身体的・精神的諸問

題は、アルコール依存症患者とその家族に、さまざまな生活上の困難を引き起こす。アルコール依存は、飲酒による重大な交通事故や、うつ、DV等の多様な社会的諸問題に深く関わ

ることが知られており、わが国においても、年間6兆円を超える社会的費用がアルコール関連問題に費やされているといわれている。このような状況のもと、それまで公的支援の枠の外で活動してきた当事者組織・自助グループ(SHG)によるピアサポートが、アルコール依存症者とその家族の抱えるニーズをすくい上げるものとして、地方自治体の注目を集めつつある。アルコール依存症者の自助グループAA(アルコホリクス・アノニマス)は、かねてより独特の回復プログラムに基盤をおいたグループの活動によって、断酒会等とともにアルコール依存症に対し、一定の治療的効果を上げている。AAメンバーのアルコールからの離脱に関しては、「スピリチュアリティ」が重要な概念となっているが、このようなAA独自ともいえる生活世界の認識について詳細に分析し、メンバーの回復の過程を明らかにすることは、アルコール関連問題に携わる援助専門職者の教育にも寄与することになると考えられる。援助専門職者がアルコール問題を理解し、有効な支援に繋がっていくためには、当事者の住まう世界を理解すること、また当事者のいわゆる「底つき体験」から、アルコール依存症者がいかにして回復していったかという過程を理解することが重要である。当事者の主観的世界の理解を深め、援助専門職者のアルコール問題への働きかけを促進するためには、AAのプログラムの活用実態とその分析、スピリチュアリティ、ハイヤーパワーといった概念に代表されるAAの思想及びその背景についての分析が必要である。AAメンバーのアルコールからの離脱と回復を取り上げた研究には、古くはBateson(1972)によるものがあり、わが国でも平野(1995)の研究があるが、これらはメンバーの変化と複雑なプログラムの活用の関連を分析する視点にたつものではない。最近の研究で、AAのプログラムやスピリチュアリティに関する問題を扱ったものには、児島(2000)葛西(2003, 2005)などがある。

## 2. 研究の目的

本研究においては、アルコール依存症者の自助グループであるAAにおけるピアサポートを通して、メンバーがどのように回復していくかを、AAメンバーの「語り」を質的に分析することによって明らかにする。その際、(1) AA独自の回復プログラムが、メンバーにどのように活用されているのか。(2) 回復したメンバーは、AAの活動の鍵概念である「スピリチュアリティ」を自らの回復過程にいかに位置づけ、アルコール依存がもたらすさまざまな生活上の障害と向きあってきたのか。(3) AAの思想的基盤ともいえる「スピリチュアリティ」は、当事者が自らの生活困難を克服することにどのように役立って

いるのか、の3点に注目する。本研究では、これまでのインタビュー結果で明らかになった事実を踏まえ、さらにメンバーの回復と回復プログラムの関係、スピリチュアリティ、ハイヤーパワーといった鍵概念と当事者の変容との関係を、インタビューを重ねることによって解きほぐし、理論構築を行う。

## 3. 研究の方法

AAメンバーのプログラムを通しての変容について、AA関連の文献・資料を整理、これらを分析し、当事者の行動の変容を見る視点と枠組を設定した。さらにAAメンバーの語りを分析し、メンバーの回復過程の実態および回復過程においてAAプログラムとスピリチュアリティ概念がどのようにメンバーに作用し、人格の変容をもたらしたのかを考察した。

## 4. 研究成果

われわれは、AAにおけるメンバーの変容に着目し、この変容がいかにして生じるかにつき検討を行った。その結果、AAに参加するようになったメンバー(以下、すでに回復したAAメンバーと区別するために、新たなメンバーを参加者と呼ぶことにする)が回復するためには、次に挙げる4つの要因が重要であるという結論に至った。

### (1) 動機づけを手に入れること

野口裕二も指摘するように、AA参加者が断酒に至るためには、いわゆる「底つき」とは別の契機が必要となる(野口 1996:104)。「底つき」経験を得たのちに、さらに断酒をし続けるためには、AAミーティングへの継続的参加が重要な鍵となる。では、ミーティングへの継続的参加を促す要因とはどのようなものであろうか。

参加者は必ずしもはじめから自ら進んでミーティングに足を運んだわけではなく、多くは精神病院の医師やケースワーカーに勧められてミーティングに参加する。医師に「酒をやめるため、ミーティングには毎日参加するように」といわれ、ともかく足を運んだというAAメンバーは少なくない。そうした人びとの多くは、野口のいうようにAAでのコミュニケーションが独特であることに気づいている(AA 2006:50, 86)。AAでは他のメンバーの関心を集めることや、好感をもたれることによって得られる称賛や同情といった見返りが期待できない。ミーティングでは、メンバーによる酒の失敗体験談が次々と披露され、そこでは自ずと人間の持つ弱さが暴露されるが、このことに対しメンバーはなじることもなければ批判することもない。AAミーティングの特徴である「言いつばなし、聞きつばなし」原則のもとでは、弱さをさらけ出して否定的な反応をされることがないかわり、強さを示しても称賛されることはない。AAミーティングでは称賛や同情を得るこ

とが参加の動機づけにならないのである。野口は、この点に参加者の認識論上の転換点があるとみる。すなわち、参加者が「規範を探りあて、適応を果たし、なんらかの報酬効果を得ようという発想自体が間違っていたのではないか」（野口 1996:113）と感じるところから、参加者の認知に変化が生じるというのである。野口は「ただ自分自身のために参加し、自分が表現したいものを表現し、その結果を自分で引き受け、そうすることの心地良さを経験すること」が参加の動機づけであると結論づける（野口 1996:113）。後述するように、この認知の変化は、やがて自己と世界との関係の組み替えへと進んでいく。

われわれは、むしろ初発の動機づけとして、参加者が AA メンバーに感じる「希望」が重要な要素であると考え。参加者は、AA が通常のコミュニケーションのあり方とは異なるコミュニケーションで成り立っており、しかも、そのような集団の中でメンバーたちが淡々と「飲まない生き方」を実現していることに希望を見いだしている。このようにすれば自分も回復できるのではないかとという参加者の思いが、ミーティングへの継続的参加を促す大きな要因と考えられる。

#### (2) 自覚すること・自覚し続けること

AA プログラムには、メンバーを断酒に導き、飲まない生き方を実現させるためのさまざまな知恵が盛り込まれている。

AA に参加する人びとにとって重要な点は、まずもってアルコール依存症とは病気であること、この病はまた、対人関係に障害を来すものでもあることを徹底的に自覚することである。この自覚は、ミーティングによってもたらされる。ミーティングとはアルコール依存であることを自覚し、確認する場である（葛西 2007:124）。AA ミーティングにおいて、新たな参加者は、アルコール依存症者とは以下のような特徴を持つこと、それはまさしく自分に当てはまることを自覚する。

- ①アルコール依存症者は、アルコールに対し抑制喪失の状況にある。彼・彼女らは、「ほどほどに酔う」ことができない。
- ②アルコール依存症は治癒することがない病気である。放置して飲み続ければやがて死に至る。
- ③この病気は、否認の病である。この病気にかかったものは「自分はアル中などではない」と主張し、アルコール依存症でないことを自分にも他人にも証立てようとして失敗を重ねる。
- ④飲酒問題は他人との関連で生じる。アルコール依存症者の飲酒は、他人を巻き込む飲酒である。
- ⑤アルコール依存症者は、自己との関係にも、他人との関係にも問題を抱えている。

ここから明らかになるのは、アルコール依

存症者は自分が酔っぱらわない方法を考えたり、飲む回数をコントロールしようとしても無駄であるということである。これらのことから、AA では「最初一杯を避けることだけに専心すべき」と結論づける（AA 2005→2007:9）。

ここで特筆すべきは、「アルコール依存症者であることの自覚」は、繰り返し行われる必要があることである。この自覚が希薄になると飲酒欲求に結びつきやすく、スリッ（再飲酒）を招く危険があるためであろう。スポンサーになって新しい AA 参加者を支援すること、ミーティングで正直に自分の経験を語ることなどは、「アルコール依存症者である自分」を忘れないようにするために有効である。AA プログラムは、その都度メンバーに「アルコール依存症者」であることの自覚を呼び覚ますという機能を持っているのである。

#### (3) 与えられたものを受け止め、受け入れること

AA プログラムは、単に飲酒をやめることのみを目指しているわけではない。AA では「飲まないで生きる」こと、すなわち参加者の新しい生き方そのものに積極的な価値を見いだす。飲まないでいるだけでは消極的であり、「飲まないで生き続ける方法」を学び、実現することがプログラムの本質であるとみるのである（AA 2007:28）。前述した「認知レベルの変化」は、通常とは異なるコミュニケーションが展開される場に身を置き続け、飲まない生き方を実践している AA メンバーとともにいながら、プログラムを活用し続けることによって生まれる。参加者が「目や耳を開いて、周囲の状況を感じ取って、こういうふうにしていけば回復があるのかもしれないと受け止め、（メンバーを自分の；引用者注）モデルとしていく」（葛西 2007:125）ことを引き受け、AA プログラムを実践していくことで何が変化するのだろうか。ひとことでいえば、それは自己と世界との関係の変容であり、他者の意味づけの変化である。

アルコール依存症者は、「意志の力」を信じている人びとであるといわれる。彼ら・彼女らは完全主義者であり、どんな欠点も許容することができず、自分自身に対しては特にそうである（AA 2007:87）。彼ら・彼女らは絶対に届かない理想を目指して必死で苦闘する。意志の力を信じて、自力で酒をコントロールしようとするものの、その企てはつねに失敗するため、あげくうつ状態になり、自罰的にもなる。自分と自分以外のもの（酒がその典型であるが、周りにいる他人もそうである）を意志の力でコントロールしようとし、思い通りにいかないと落ち込むのである。こうしてアルコール依存症者は深い孤立感を覚えるようになる。このあたりのこと

を、メンバーは次のように述べている。「何年もの間に身についた、疑いや防衛的なメカニズムの根深い習慣は一晩で拭いされるほど簡単なものではない。わたしたちは理解されず、愛されていないと感じながら行動することに、完全に慣らされている」(AA 2007:73)。

アルコール依存症者にとって、自分の思い通りにならない他者＝他人は、加害的で侵襲的な存在である。自分はダメな酒飲みなどではない、自分はもっと正当に評価されてしかるべきだという否認と自己愛、コントロールしようとしても自分の思い通りには決してならない他者への恨みは、アルコール依存症者にとっての自己－他者関係を、はなはだ歪んだものにしてしまう。アルコールという化学物質がもたらすものは身体的・精神的な病いであるが、このような病いはまた、「他者との関係性」のエラーとして現象するのである。アルコール依存症者とは、意志の力を過信しこれを信奉するあまり、意のままにならない他者を自己にとって加害的なものとして捉える傾向が強い人びとであるといえよう。

ミーティング参加者は、AA で自己を見つめ直すことによって、アルコールのもたらす病理の中核にあるものが、前述したような「自己への過信」であったことに気づく〔注：自己や他者をうまくコントロールできていると感じたときの高揚感と、できないと感じたときの落ち込みやうつ状態は表裏一体であって、これらはまた、「酔い」状態に非常に似ていることから、AA ではこの高揚感や落ち込みを「ドライ・ドラック」と呼ぶ。〕。「意志の力」に限界があることが、底つきを経てのちさらに AA においてアルコールがもたらす病いの実相を自覚することによって確認されるに至るわけだが、ここで重要なことは、「意志の力」への過剰な信奉の誤りが参加者の中で明確化されねばならない一方で、プログラムの実践は参加者の「意志の力」により、つねに意識的に行われる必要があるということである。さらにまた注意すべきことは、AA メンバーたちの多くが、意識的にプログラムを実践するような力は自分だけで獲得したのではなく、AA によって「与えられたもの」である点を強調している点である。そのあたりのことを、メンバーは次のように述べている。

「私は、自分の力で AA の回復のプログラムを自らの生き方に取り入れた、と錯覚はしていない。私はこのチャンスを贈りものとして受けたことをいつも忘れずにいよう。」(AA 2006:29)

「本当のドン底はすぐに飲んでしまう自分のなかにあると感じるようになってきた。仲間がそれをわたしの最奥の自分に入れてくれたのだった」(AA 1994:130)

われわれのインタビューでも、メンバーが次のように語っている。「アルコール依存症のお酒が止まることができたということと、やめ続けたいという思いが、その、ミーティング出て自分がよくなっていくなかで感じ取ったということ。そして何か働いているわけですから、自分になかった力加わったっていうことは、まあ『事実』として受け入れたんですよ (傍線は筆者)。」

これらの言葉からもわかるように、外部から何らかの力が働き、その力に導かれて自分に変化していくことを、メンバーは感じ取っているのである。

#### (4) 他者へ向かうこと

かくして参加者は、他者から与えられた力によって「飲まない生き方」に向け歩みだすこととなる。AA メンバーによって参加者の内奥に据えられた言葉を足がかりとし、つねにその言葉に立ち戻りつつプログラムを実践することで得られるものが、スピリチュアル・グロウスと呼ばれる人格の変容である。これは、①自己の肯定と、②他者への信頼に基礎づけられ、③侵襲的でない他者と自己との間に親密な関係を再構築することによってもたらされる。このような関係性の再構築を下支えし、それ自体は決して現前しないものであるにもかかわらず、プログラムを実践するなかで感じ取られ、参加者をつねに先導するもの、それがハイヤーパワーと呼称される超越的な存在である。ハイヤーパワーは、参加者・AA メンバーにとって外部／他者であると同時に、個々のメンバーの内奥に据えられたものとしても感得されるという両義性をもつ。ハイヤーパワーは、直接現前することはないものの、もっとも基本的な部分で自己のありようを規定する他者として、参加者にとって重要な意味を持つものである。

#### (5) 懐疑を通してハイヤーパワーを信じること

AA においてプログラムや、メンバーの間で共有されている行動様式は、メンバーが一体性を持つこと (cf. チェーンハンド)、仲間であること (cf. お互いを「仲間」と呼び合う)、あるメンバーを他のメンバーが受け入れているということ (cf. メンバーが語りを始めの際の名前の復唱、狭義の「フェロウシップ」〔注：広義においては仲間関係を指すが、狭義においてはミーティング後の喫茶店等での飲食などを指す〕) を参加者に対して示している。しかし、それらに対する懐疑は生じていないのだろうか。あるいは、生じることがメンバーの回復にとってどのような意味を持つのだろうか。また、他人を信頼することは回復に不可欠であるとされるが (Fisher 2008)、目の前にいる他のメンバーが信頼できる人物であるという確信は揺るがないのだろうか。

近年の SHG をめぐる研究においては、SHG のメンバー間で、かならずしも一枚岩のアイデンティティが共有されているわけでもないことや、体験の共有は部分的なものであることが指摘されている（伊藤 2005；佐藤和久 2002；佐藤恵 2008）。このような研究成果をふまえると、AA における参加者が、上で述べたような懐疑を持ったとしても、不思議ではないだろう。

しかし、プログラムや他のメンバーに対する懐疑や不信があるからこそ、回復がうながされるのであり、その際にハイヤーパワーが重要な役割を果たしているのではないだろうか。“プログラムはほんとうに効くのか” “この人の言うことをほんとうに信じてよいのか” “この人はほんとうに信頼できる人なのか” そういった懐疑や不信に満ちた危うい体験をし続けるなかで、垣間見られるかすかな希望（（1）参照）を見出し、そのことを通してハイヤーパワーとの交信が始まるのではないだろうか。

入不二（2009）は、「無限に遠い現前しえない『本物』」（p. 193）がプロレスにおいてどのような位置を占めるのかを考察し、以下のように述べる。「プロレスとは、『ほんとうの本物の強さ』を『虚の神＝ドーナツの穴』としてあらしめ、かつそれを『不可視の根拠』として己を支えるドーナツ型の行為である。」（p. 220）入不二によれば、ドーナツの穴は、「ドーナツを穴あきドーナツたらしめる本質的なものとして、無いという形でいきいきと在る」（p. 219 傍線は原文では傍点。以下同じ）とされる。

そして、入不二は、一つ一つの技の交換の中でプロレス行為の境界線が引き直される、プロレスにおけるコミュニケーションの成立には、つねにコミュニケーションの崩壊の可能性が亡霊のようにつきまとうのであり、その亡霊をルールによって封じ込めるのではなく、亡霊を呼び込みつつ鎮める、暗黙の了解が重視されるとする。そして、「『暗黙の了解』の危うい成立は、暗黙の了解を超える『ほんとうの本物の強さ』という『向こう側』を生み出すし、また、逆に、『向こう側』への緊張関係が存在するからこそ『暗黙の了解』の成立が焦眉の課題となる」（p. 222）とする。

AA においても、「言いつばなし、聞きつばなし」のミーティングを含め、あらゆる場面で、“（プログラムや人びとを）ほんとうに信じてよいのか” という問いがメンバーの中で繰り返され、「信じられること」と「信じられないこと」との間の暫定的な線は絶えず引き直される。しかし、そのような線引きが繰り返される中で、線引きを超えた、ハイヤーパワーという「向こう側」が作り出されるのではないだろうか。そして、同時に、ハイヤ

ーパワーが、線引きを超える勇気を与えてくれるのではないだろうか。

本研究における AA メンバーからのインタビューでは、以下のように語られている。「ステップやろうとかそんな気はないんですけども、しばらくミーティング出て、そのうちほんとにお酒が止まって、止まってた。あの、そういう事実しかないんですよ。理屈でわかったわけでもなしに。」つまり、信じる、信じられないという線引きを超えて、信じざるを得ない「事実」が生じたということが語られている。けっして、信じようと努めて信じられるようになった、のではないのである。「私たちがドーナツの形に密着して考えるときにはじめて、真中の『空』は意味を持つ」（p. 219）のである。

#### 【文献】

- AA (1994) 『回復への道 part II』 AA 日本ゼネラルサービスオフィス  
AA (2006) 『信じるようになった』 AA 日本ゼネラルサービスオフィス  
AA (2007) 『どうやって飲まないでいるか』 AA 日本ゼネラルサービスオフィス  
AA (2009) 『12 のステップと 12 の伝統』 AA 日本ゼネラルサービスオフィス  
Fisher, D. B. (2008) Promoting recovery. In T Stickley and T Basset (Eds.) *Learning about mental health practice* (pp. 119-139). Chichester, England: John Wiley and Sons.  
伊藤智樹 (2005) 「ためらいの声：セルフヘルプ・グループ『言友会』へのナラティブ・アプローチ」. 『ソシオロジ』 50(2) 3-18.  
入不二基義 (2009) 『足の裏に影はあるか？ ないか？：哲学随想』 朝日出版社  
葛西賢太 (2007) 『断酒が作り出す共同性：アルコール依存からの回復を信じる人々』 世界思想社  
野口裕二 (1996) 『アルコールリズムと社会学：アディクションと近代』 日本評論社  
佐藤知久 (2002) 「共通性と共同性：HIV とともに生きる人々のサポートグループにおける相互支援と当事者性をめぐって」. 『民族学研究』 67(1) 別冊 79-98.  
佐藤 恵 (2008) 「起点としての『聴く』こと：犯罪被害者のセルフヘルプ・グループにおけるある回復の形」 崎山治男ほか編著『＜支援＞の社会学：現場に向き合う思考』 青弓社 40-61

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計8件)

- ①児島亜紀子「ソーシャルワーク倫理におけるオルタナティブ——2大規範から文脈、関係、他者に基礎づけられた倫理へ」社会問題研究、査読無、第59巻、2010、7-19
- ②松田博幸「ソーシャルワーカーはセルフヘルプ・グループから何をすることができるか? : 自己エスノグラフィの試み」社会問題研究、査読無、第59巻、2010、32-43
- ③児島亜紀子「英国ポストモダンソーシャルワークにおける認識論的および倫理的課題をめぐって——ハウ論文の批判を中心に」社会問題研究、査読無、第58巻、2009、29-43
- ④松田博幸「セルフヘルプ・グループの原理に根ざした精神障害者ビジネスの展開: カナダ・オンタリオ州におけるオルタナティブ・ビジネスの現状」、社会問題研究、査読無、第58巻、2009、185-193
- ⑤松田博幸「セルフヘルプ・グループをめぐる『越境』: 当事者同士の『つながり』の技法」、ソーシャルワーク研究、査読無、第34巻第4号、2009、31-39
- ⑥児島亜紀子「主体性と他者性——他者に向けて開かれた援助のありようを探る」社会問題研究、査読無、第57巻1号、2007、35-60
- ⑦松田博幸「カナダ・オンタリオ州における精神障害者当事者事業と研究機関とのパートナーシップ—参加型アクションリサーチの意義—」、精神障害とリハビリテーション、査読無、第11巻第1号、2007、36-39
- ⑧松田博幸「セルフヘルプ・グループがソーシャル・ワーカーのアイデンティティに及ぼす影響—あるソーシャル・ワーカーからのインタビューより—」、社会問題研究、査読無、第57巻第1号、2007、1-33

[学会発表] (計2件)

- ①松田博幸「セルフヘルプ・グループの視点から排除とエンパワメントを考える」日本医療社会福祉学会、2009. 9. 12、関西学院大学
- ②児島亜紀子「社会福祉学の基盤としての主体概念に関する批判的考察:singularityの〈再〉発見とともに」日本社会福祉学会、2008. 10. 11、岡山県立大学

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

児島 亜紀子 (KOJIMA AKIKO)  
大阪府立大学・人間社会学部・教授  
研究者番号: 40298401

### (2) 研究分担者

松田 博幸 (MATSUDA HIROYUKI)  
大阪府立大学・人間社会学部・准教授  
研究者番号: 30288500